仮面ライダーフォーゼとメテオ 過去と目的の仮面ライダー

ペイオネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーフォーゼとメテオ　過去と目的の仮面ライダー

【Ｎコード】

Ｎ８２０６Ｚ

【作者名】

ペイオネット

【あらすじ】

それは、過去に仮面ライダーに助けてくれた仮面ライダーとある目的のために動く仮面ライダー今、彼らが出会う時、少女達の出会いが訪れ、共にゾディアーツを倒す物語（これは仮面ライダーフォーゼ＆ヒロインズの２代目にあたる話です。後やめてごめんなさい。）

プロローグ1（前書き）

如月　星牙くんは自分が作った弦刀より、クールなところが多い高校2年生です。成績は中の上って感じです。

プロローグ1

ここは、とある剣道場

少女達は剣道場で竹刀を持ち今日も汗をかきながら稽古を続けていた。

「先生」

「どうしたんだい？」

生徒の一人が質問したのは、さわやかな髪はポニーテールでまとめ、下はスク水着であり上着は軍服をきた女性だった。

彼女の名は北郷章香元は海軍所属の魔女（ウィッチ）かつて駐欧武官を務めたこともあり、頭脳明晰。軍人の間では「軍神」との呼び声も高い。

「あの道場に貼り付けている絵って誰が書いたのですか？」

生徒が指を指している方向を見るとその絵は、クレヨンで描かれ、顔は昆虫の飛蝗をモチーフであり首には赤いマフラーが巻いた絵だった。

「ああ、あれは君達がここに入門する前の生徒が描いた絵だ。よく

泣きじゃくっていて、私も少し、手におえなかったからな」

章香は微笑しながら答えた。

「でも、これって仮面ライダーにそっくりですね」

「かめんらいだー？」

章香は生徒のいった言葉に首を傾げた。

「はい、仮面ライダーというのは、人類の自由と平和を守るため、密かに悪と戦っている都市伝説のことですよ」

「へぇー」

生徒の説明で章香は感心した。

「後、今最近、噂になっている仮面ライダーフォーゼがいるんですよ～」

「仮面ライダーフォーゼ？」

もう一人の生徒が仮面ライダーの話を聞き、今最近の仮面ライダー、フォーゼがこの地球の為に戦っていることを話した。

「私、携帯で友人からフォーゼの画像が届いたので先生見てください。」

生徒の携帯を受け取り、携帯の画像をみた。これをみた章香は・・・・

「はは、仮面ライダーってこんなイカみたいな頭をしたのもいるのかい？」

「正式にはロケットだそうです」

フォーゼの画像を微笑しながら笑っている章香を生徒がフォーゼの頭をロケットと説明した。

「・・・・これは」

「どうしたんですか？」

章香はフォーゼの画像を見て、あることに気づいた。

（この拳の付き方はあの子が近所の子と喧嘩するとき、よく拳を突き出して、喧嘩していた態勢だ）

章香はフォーゼとゾディアーツの戦いを見た時、

（この戦い方・・・やはりあの子が武器を取らずに拳と蹴りで戦っている時も一緒か・・・・）

章香は生徒に携帯を返して、道場から出て、今も青い青空を眺めた。

「仮面ライダー・・・フォーゼ・・・・星牙・・君なのか」

章香はそう呟きながら青空を眺めた。

プロローグ1（後書き）

仮面ライダーフォーゼの正体が軍神に見破れました。次のプロローグは星牙くんとメテオの登場です。

プロローグ2（前書き）

プロローグ2です。本編はペルセウス編で始めようと思います。

プロローグ2

それは何故か、突然起こった。

燃える町、死んでいる人間、そして、死んでいる人間の死臭、それを見た少年は、体をビクビクさせながら歩いた。

そして、少年はある光景を目にした。

それは、黒い服と覆面を被った連中が、家族連れの人間を容赦なく、殺した。

だが、残った少女は少年の方に気がついて、手を少年の方に差し伸べた。少年は差し伸べた方向へ、進もうとしたが、

《ブシュッ》

少女は黒い連中に首を切り裂かれ、噴水の血しぶきが噴出した。

少年はその光景を見て腰が抜け、ガタガタと震えた。

黒い連中は少年の方に気がつき、刃物を持って襲いかかってきた。

その時、彼が現れた。

「待てぃ！！」

それは頭は昆虫の飛蝗を思わせるように、首には赤いマフラーそして両手足には、銀のブーツとグローブを身に付けた戦士だった。

それを見た少年は唖然とした。

戦士は黒い連中をいとも簡単に拳と蹴りで一掃したのだった。

戦士は戦いが終わったかのように、少年を見た。

「・・・・・・・・・・・・」

「？」

戦士は何を言っているのか少年はわからなかった。

戦士はバイクに乗りそのままどこかに、去って行った。

少年は思った。

いつか、あの人のような力があれば、今頃、助けられたかもしれない・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・んっ・・・夢か」

少年はベッドから起き上がった。

「また、あの夢か・・・・ここ最近、毎日続くな?」

少年はベッドの横にある4本のスイッチをセットしたベルトだった。

「6時半・・・・行くか?」

少年は目覚まし時計を見て、下に下りた。

少年の名は如月　星牙
またの名を仮面ライダーフォーゼ

一方、その頃、６時半でも霧が漂う所に黒い服を纏った男がいた。

「天の川学園・・・・・ここに奴らがいるのは・・・アタリか・・・・・ハズレか」

男は黒いベルトを腰につけ、青いスイッチをセットした。

「変身！！」

男が変身したのは頭は彗星をモチーフとした頭で、体は夜空の星をイメージした体だった。

仮面ライダーメテオ

朔田　流星

過去と目的の仮面ライダーが出会う時、少女達の物語とゾディアーツの戦いが激しくなっていく。

プロローグ2（後書き）

本編での登場ヒロイン作品はリリカルなのはのティアナ編でいこうと思ってます。いきなりですいません。

スイッチ1　俺の友達（前書き）

ペルセウス編とリリカルなのはのティアナ編・・・・はじまります。

スイッチ1　俺の友達

俺の名は如月　星牙　　もともとは、ある事件のきっかけで親をなくしている。その事件後、ウィッチーズに保護され、後に軍神と呼ばれたウィッチ、北郷章香さんに引き取られ、この彼女の家に住んでいる。

「さて・・・・今日の朝ご飯はサラダとパンとハムエッグだな」

星牙は早速、今日の朝ご飯を作り、２５分で出来上がった。そして、星牙は・・章香のある物を食べなきゃならなかった。

冷蔵庫からラップで包んだおにぎりのような物体だった。正式にはおにぎりに似ているのだが、中にはカニのハサミとか、エビの尻尾・・あるいは中にはみかんがあるのだ。

これを作った人物はここの家の主、北郷章香であった。彼女は頭脳明晰で免許皆伝と星牙はきいてるが、料理だけは、駄目なのだ。ある時、彼女が調理場で包丁を持った時、星牙すら、見たことのない料理を作るのだ。それを防ぐため、小さい頃から料理を学び、章香に作らせまいと必死に作り続けたのことだ。

「行ってきます」

この家に住んでいるのは星牙と章香の二人だけである。章香は軍の仕事で忙しく、帰ってくるのは1カ月の1日だけなのである。星牙

は例え一人になっても、学校とバイトで働く友達がいたからだ。

「星牙ーー！！」

星牙を呼んでいるのは髪はリボンで結んでいて、目の瞳は緑色で星牙がバイトする洋菓子店ストレイキャッツのバイト仲間の芹沢　文乃

「にゃあ」

こっちは猫のような挨拶をして、髪は猫のような耳がある薄い青髪で同じバイト仲間の少女、霧谷　希である。

一緒に天高（天ノ川学園高校）に向かうとき、今度は星牙が所属する仮面ライダー部のメンバーだった。

茶髪でライダー部のマークがつけてあるカバンを持った少年　歌星賢吾

彼の父は仲間の裏切りによって死亡し、息子の賢吾の為に残した。アストロスイッチとラピッドハッチを駆使して星牙達と一緒にフォーゼの敵、ゾディアーツを退治する石頭

黒く長いロングヘアーを纏っているのは、宇宙オタクで、星牙の幼なじみの城島　ユウキ

そして、髪はショートヘアーで、学園のクィーンの風城　美羽、そして美羽の隣にいるのは、アメフト部のキャプテンであり、フォーゼと一緒に闘うロボ、パワーダイザーを操るスポーツマンの大文字　隼

そして、すこしチャラい服装とあらゆる情報を伝える天高1年生ＪＫ

そして、なにやら不気味な気を放っているオカルト少女、野座間友子

これが仮面ライダー部の全員だ。

「おい、如月　君は前にロケットとドリルを二回リミットブレイクしたそうじゃないか？　よこせ」

《ギクッ》

星牙は賢吾の頭には何かレーダーのような物があるのかと思っていたが、星牙は仕方なく学ランの中からロケットとドリルのアストロスイッチを賢吾に渡した。

「全く、ロケットとドリルの二回リミットブレイクを使ったことでしばらく、二つともチャージを終えるまで使えないぞ　」

「は～まじかよ～」

賢吾の言葉に星牙は溜め息をついた。

「にゃあ、公園のベンチに人が倒れている」

『えっ！？』

希の言った言葉に、星牙達は公園の方に目を向けると、そこにはベンチの上で寝ている。茶色の制服を着たオレンジ髪のツインテールで頬にはすこし跡が残った少女であった。

「おい、大丈夫か！！？」

星牙は少女の方に通りかかって、頬を叩こうとした時、

「あちっ！！」

『！？』

賢吾は少女の額をそーっと手を差し伸べた。

「やばいな。この子は３９度の熱がある」

『えーーーーー！！！！！』

全員は驚いた。

「じゃあ、ラピッドに入って体を休めましょうよ！！」

「部長の私も同感よ。急いで、学校に行きましょう」

ＪＫの判断に美羽は賛成し、一同も賛成した。急いで学校についたが、

「げっ　大杉だ」

星牙は校門の前でちょろっと見たら、星牙のクラスの副担任の大杉忠太である。だけど、大杉は何故か不機嫌で、イライラしていた。

「あーーーー　あの糞校長！！！！　俺の園田先生にーーーーー！！！！」

何故か泣いていた。

校門の前の一同は

「よし、俺と美羽が先生を相手している時、お前たちは、その子を看病してやれ」

隼の意見に一同は呟いた。

《バーーーン！！》

『！！？』

何故か、地響きが聞こえた。

「わりぃが、此処は俺の出番だ。行くぜ　賢吾！！」

「如月！？　・・・・ユウキ、その娘を頼んだぞ！！」

「城島ユウキ、了解しました！！」

賢吾はアストロスイッチカバンを持って星牙を追った。

そして、ユウキは文乃と一緒に抱えて、ラピッドハッチに向かった。

スイッチ1　俺の友達（後書き）

クライマックスヒーローズフォーゼのオープニングの歌はいいです。

スイッチ2フォーゼ（前書き）

この世界のフォーゼは弦太郎のフォーゼと違って技名は違います。
暖かい眼で見てください。

スイッチ2フォーゼ

「如月！！　ロケットとドリルの代わりを差し込め！！」

賢吾の指示に星牙は頷いた。

「ロケットとドリルが使えない今、コイツで行くか！？」

星牙はロケットとドリルの穴にマジックハンドとスパイクのスイッチをセットした。

そして、全てのスイッチをセットして、フォーゼドライバーの４つのスイッチを押して、カウントダウンが始まった。

〔スリー　トゥー　ワン〕

「変身！！」

星牙は右腕を腕にかざした時、星牙が光に包まれた時、姿を現したのは、頭は白いロケットと体は宇宙飛行士をモチーフの戦士　仮面ライダーフォーゼ　彼なのだ。

一方、その頃ユウキ達は、

「ここなら、大丈夫でしょ」

「だけど、この子の制服・・どこかで見たような」

ユウキはラピッドハッチで少女を寝かせて安心している時、美羽は少女の制服を不思議そうに見た。その時、少女の懐から、白いカードのような物が落ちた。

「何スか　これ？」

「にゃあ」

ＪＫは白いカードを拾い上げ、希は不思議そうに見た。

《初めまして》

『うわあああ！！』

一同は白いカードが一人でに喋ったことに驚いた。

一方、

フォーゼの敵、ゾディアーツはビルの柱を次々と破壊していった。

「邪魔だ・・・・・・邪魔だ！！　邪魔だ！！　邪魔だ！！　邪魔だーーーーー！！！！！だ」

ゾディアーツは柱を壊す度、怒り狂いながら、破壊した。

「マッシグラー！！！」

「！？」

フォーゼが乗るマシン、マッシグラーでゾディアーツに体当たりをくらわした。

「仮面ライダーフォーゼ・・・・タイマン張らしてもらうぜ！！！」

フォーゼは右腕を突き出して、ゾディアーツに挑んだ。

「ガアア！！」

ゾディアーツの強力な剣がフォーゼに切りかかろうとするが、フォーゼはギリギリでかわした。

「あの剣はやばいな・・・・だったら、武器を防ぐには、これか！！」

フォーゼは白のスイッチを４番目のレーダースイッチを抜き出して、シールドスイッチにセットした。

〔シールド・オン〕

シールドスイッチを押した瞬間、コズミックエナジーでマテリアライズされたシールドモジュールが出現した。

「ガアア！！」

「ふん！！」

フォーゼはシールドモジュールでゾディアーツの剣を防ぎながら、戦った。

「あれは・・・・」

賢吾がフォーゼとゾディアーツの戦いの場に到着し、早速、ハンバーガー型のフードロイド、バガミールを変形させ、敵ゾディアーツの検索を始めた。

「ウガア！！」

《ガキーン》

「くそ！！　しつこい野郎だ」

フォーゼはシールドモジュールで防いだ瞬間、３番目のスイッチにセットしたスパイクモジュールを押した。

〔スパイク・オン〕

フォーゼの左足に棘が多くついたスパイクがマテリアライズされたスパイクモジュールを展開した。

「はあ　うりゃあ！！！」

「グガァ！！」

フォーゼはマテリアライズされたスパイクモジュールで敵ゾディアーツは圧倒しつつあった。

だが、検索の結果を見た時、驚きの表情をみせた。

「あの星座は・・・・ペルセウス座のゾディアーツ、まさか」

賢吾はペルセウスゾディアーツ蛇に包まれた左腕をフォーゼに向けて掴もうとした。

「避けろ！！如月」

「！？」

賢吾の指示にフォーゼは避けたが、工場中のレールがペルセウスゾディアーツの左腕に掴まれた瞬間石になった。

「おいおい、まじかよ」

「ウガア！！」

「厄介な奴に出くわしたぜ！！」

フォーゼはモジュールを戻し、ペルセウスゾディアーツの攻撃を避けた。

「だったら、コイツで行くか」

フォーゼはクリアカラーのスイッチを1番目のスイッチと取り替えてセットした。

〔エレキ・オン〕

エレキスイッチを押した時、フォーゼの右腕は金色に変わり、そして、エレキに包まれ、フォーゼは武器のビリーザロッドを手にした形態、エレキステイツにチェンジしたのだ。

「行くぜ！！」

フォーゼはビリーザロッドを使ってペルセウスゾディアーツに挑んで行った。

「はあ！！」

「ガアア！！」

「うりゃ！！」

「ガルァ！！」

激しいぶつかり合いでペルセウスゾディアーツは距離を引いて、一気にとどめをさそうと力を剣に集中させた。

「でかいのが、来るな！！　だったらこっちもリミットブレイクだ！！」

フォーゼはエレキスイッチを取り出し、ビリーザロッドの下にセッ

トした。

〔エレキ・リミットブレイク〕

「ウガァァ！！」

「雷神・一閃！！！」

フォーゼのビリーザロッドとペルセウスゾディアーツの剣の激しい衝撃波が激突した。

《バーーーーン！！！》

衝撃波の爆発で両者とも壁に激突した。

「グゥゥ・・・・我が心を乱すもの全て排除する！！　全て！！」

そう言い残し、ペルセウスゾディアーツは逃げ去って行った。

それを陰で見ていた。ゾディアーツの幹部ホロスコープスのリブラゾディアーツとスコーピオンゾディアーツのスイッチャーである園田　紗理奈がいた。

「素晴らしい・・・・彼は本物ですよ」

リブラは薄笑いをしながら、呟いた。

スイッチ3訳あり（前書き）

あけましておめでとう・・・ティアナと星牙達の話です。ティアナは友子が苦手にしときました。

スイッチ3訳あり

フォーゼ対ペルセウスゾディアーツの闘いの後、星牙は一時ラピッドハッチに戻り、友子に手当てをさせてもらった。

「いってーー！！！」

星牙は傷ついた体に友子の謎の消毒液をついた綿でポンポンとつっついたが星牙はあまりのしみる痛さで大声を上げた。

「効くから、特にイモリは健康的にいいって・・・・」

「マジ・・・・」

「本当・・・・」

あまりの不気味な友子の笑みに星牙は少しひいた。

「しかし、あのゾディアーツ・・奴の行動理由が分からん」

賢吾がペルセウスゾディアーツの暴れる理由に悩んでいると・・・・・・

「う・・う～～ん」

『!?』

ラピッドハッチで眠っていた少女が目をこすりながら目覚めた。

「おい、大丈夫か・・・・・」

「大丈夫よ・・・・カナヘビの尻尾で作った薬を飲ませたから、熱が下がったのよ」

『えええええーーーーー!!!!』

「ほんの薄めだけどね」

《チーーーン》

それを聞いた少女は気絶してしまった。

気を取り直して、

「あの・・・・ありがとうございます。公園で休んでいる所助けていただいて」

少女はぺこりと頭を下げた。

「礼はいいよ・・・・君が無事で何よりだ。」

星牙はニコッと笑顔を出した。

「それはそうと、君はどこからやってきた？　その制服を見ると、学生の服ではないらしいな」

賢吾の質問に少女は答えた。

「私はミッドチルダの管理局機動六課のスターズ４のティアナ　ランスターです。」

「管理局！！？」

「！？」

ティアナの言葉に賢吾と友子は驚いた。

「賢吾、なんだ、その管理局って」

星牙は一人きょとんと賢吾に質問した。

「そういえば君にはまだいっていなかったな。如月、この天ノ川学園を中心に3つの街があるんだ。」

「3つの街？」

「ああ、一つ目は管理局が存在するミッドチルダ、あの街は魔法という物が存在して、彼らはその魔法を使い、異世界を管理している街だ」

「異世界を管理ってスケールでかいな」

「そして、東の街はウィッチと呼ばれる少女達がいる街、ストライクシティ、チーム名はストライクウィッチーズ、彼女たちは世界各国からこの日本に集い、謎の怪異ネウロイと闘っている街だ」

「ウィッチ・・・・」

星牙はウィッチの言葉を聞いて、顔を険しくした。

「そして西の街は女性にしか反応しない兵器ＩＳ通称インフィニットストラトスがあり、ＩＳの学園ＩＳ学園がある街、ＩＳシティ」

「ＩＳ多いな」

こうして賢吾の街の説明は終わって、早速、星牙はティアナの本題に入った。

「なんで、お前はこの街に来たんだ。ミッドの奴らが心配してるんじゃないのか？」

「そ・・・それは」

星牙の質問にティアナは黙ってしまった。

「あなた・・その頬少し腫れているわね？」

ティアナの頬が腫れている所に気づき、友子は自分の医療箱から、湿布を取り出し、ティアナの頬に貼り付けた。

「これで大丈夫・・・・私の手作り湿布ヤモリの体液を湿布の内側に染み込ませた湿布・・・・・・ふっふっふっ」

それを聞いたティアナは

《チーーーン》

また気絶した。

「ティアナーーーーー！！！」

気を取り直して

「訳ありなら話せよ・・別に笑ったりしないからさ」

「はい・・・・実は・・・・・」

ティアナはこの街に来る前のことを話した。

自分は子供の頃、兄をなくし、他人には馬鹿にされる毎日を受けていた。だが、あの子、スバル　ナカジマが友達になり、訓練でもクリヤーを成し遂げていった。そして機動六課の入隊テストでスバルとの連携プレーで合格、だが、ホテルアグスタの時、ティアナのクロスファイヤーシュートは敵をすべて倒したと見えたが、仲間のスバルに当たってしまうと思ったが、副隊長のヴィータに弾き返され、叱られた。そして教導官の高町なのはの模擬戦でティアナとスバルのダブル攻撃で決まったのかと思ったが、なのはの教導の意味が分かっていなかったため、スバルはバインドで拘束され、ティアナはなのはに撃墜され、模擬戦は終了した。そして、ティアナは隊長達に文句を言ったが、シグナムに殴られた。そしてシャリオが現れ、なのはの教導の意味を知ったがティアナはそれよりも自分が彼女たちの言葉を聞かないで言ったことに悔やんでしまい、それが原因で機動六課を飛び出し、この街まで来たのだ。だが財布を忘れてしまい、雨は降り、ホテルで泊められず、公園のベンチで眠っていたのだ。

ーーーーー

「というわけなんです。」

それを聞いた星牙と賢吾と友子・・・・・だが星牙は

「ティアナ・・・・すこし、外に出ようぜ　」

「えっ」

「如月！？」

星牙の言葉にティアナは唖然とし、賢吾は驚いた。

「大丈夫だ　すぐに戻ってくる　行くぞティアナ！！」

「え・・ええええ！！」

宇宙・・月面

「うわ・・　うわわわわ！！？」

ティアナは星牙に宇宙服の着方を教え、星牙は先に行ってると言い残し、月面にやってきた。だが、初めての月面体験だったので、ま

だあまり、上手く動けなかったため、
無重力で宇宙まで飛び跳ねると思ったが・・・・

「おっと、大丈夫かティアナ？」

ティアナは星牙の声に気づきがっちりと腕を掴み、月面の下まで降りた。

そしてティアナが見た物は・・・・

「よっ」

「えええええ！！！仮面ライダーーーーーー！！！！！」

ティアナは宇宙空間に仮面ライダーがいることに驚き、あまりの絶叫が宇宙空間に広がった。

「おっととと　ティアナ驚きすぎだぞ」

「え・・その声、星牙さんですか！？　す・・すいません！！」

ティアナは宇宙服の状態でフォーゼにペコペコと誤った。

「いいって　いいって一番悪いのは、先に行った俺が悪いから」

フォーゼは苦笑いしながらティアナに誤った。

フォーゼは改まってティアナに見せた。

「ティアナ見てみろ・・これが宇宙だ！！」

ティアナはラピッドハッチから出たとき宇宙服の影響で気づかなかった。

だが、ティアナは宇宙を見上げ、いろいろな星がキラキラと輝いて、前には人類の故郷、地球が見えたのだ。

ティアナは宇宙の光景を見て、もう言葉にも出なかった。

それを見ていたフォーゼはフッと笑い、月面の地べたに座った。

「どうだ　ティアナ、お前が悩んでいるから、この宇宙空間に連れて、すこしだけでも心を癒やそうと考えたんだが、どうだ」

ティアナはフォーゼの言葉に少しだけ、心が安らいだような感じがした。だが、

「ごめんなさい・・・やっぱり」

ティアナは例え心が少しだけ安らいでもやっぱりあの悩みは消えなかった。ティアナは握り拳を作った。

「なあ　ティアナ　俺は仮面ライダーとしてヒーローなんてやっているが、根は平凡な人間だし、まだ１５歳の高校生さ　俺は本当は怪物から、世界を守るなんて出来ないし、本音を言えば天ノ川学園も無理だ・・・・俺に守れるものは精々今いる仲間と大切なものを守りたい　この気持ちくらいなものさ」

「大切なものを守る気持ち・・・」

それを聞いたティアナは心の中にその言葉が刻み込まれていった。

「だがな、お前は違う　きっと此処にいる誰よりも多くの存在を守れる・・俺は・・・そう信じてるんだ」

フォーゼは立ち上がり、両手を広げながら、言った。

「ほら・・・宇宙はこんなに広いんだ。お前が歩く場所、進む場所はいくらでもあるのさ」

彼の言葉を聞いたティアナは思わず涙を浮かべた。まるでこの人は自分の傷ついた体に癒やしが送ってくるような感じだった。

《ジリリーン　ジリリーン》

突然、４番目のスイッチがなりだし、フォーゼは黒のスイッチを押した。

〔レーダー・オン〕

フォーゼの左腕はパラポラのような機械にマテリアライズされた。

「如月ーーーーー！！！！！！！」

賢吾の声はまるで除夜の鐘の音と堂々の威力でフォーゼは片方だけ、耳をふさいだ。

「はやく　帰ってこい！！　たっぷり説教してやる」

フォーゼはレーダーモジュールを解き、急いでラピッドハッチに戻

った。

「ティアナ、そろそろ戻るぞ　賢吾は怒るとうるさいからな」

「あの・・・星牙さん」

「んっ」

フォーゼは立ち止まり、ティアナは顔を赤らめながら答えた。

「私のことは・・・　ティアナじゃなくてティアでいいです。」

「そうか・・それじゃ　ティア　戻るぞ!!」

「はい!!」

こうして二人は賢吾にこっぴどく叱られ、星牙は聞く耳持たない状態で耳をふさいだ。

スイッチ3訳あり（後書き）

それでは新年よいお年を

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

如月星牙／仮面ライダーフォーゼ

如月星牙は秋の2学期に天ノ川学園高等学校に転校してきた金髪と黄色の瞳のバッドボーイ、そして、彼の夢はこの学園で最高の仲間を作ること、彼は勉強は、出来る方で何よりまがったことが大嫌い、例えそれがエラい奴でも殴りかかることもある。そして、仮面ライダーフォーゼになった理由は、誰とも話をしない高校生、歌星賢吾と星牙の幼なじみの城島ユウキが学園の平和を乱す怪人、ゾディアーツを倒すべく、賢吾の父が残した。ラピッドハッチと宇宙の力（コズミックエナジー）を持ったスイッチ、アストロスイッチの力で戦う戦士、フォーゼに変身するベルト、フォーゼドライバーを賢吾が使おうとしたが、星牙がやってきて、賢吾からフォーゼドライバーを冗談のつもりで奪ったが、賢吾は生まれつき、体が弱く、フォーゼになることが出来なかった。だが、ユウキは星牙をフォーゼドライバーを託し、ゾディアーツと幹部ホロスコープスと闘うことを誓った。

そして、星牙、彼はある7年前から、ある村に住んでいたが、謎の怪人達に星牙を除き全ての人間は殺された。だが、星牙を助けたのは飛蝗の顔し、腕と足に銀のグローブが包み、赤いマフラーをつけた戦士に助けられた。そして、ウィッチの海軍の軍神、北郷章香に引き取られて、成長していった。彼は少年の時、守るという言葉を覚え、後にフォーゼとして仲間とともに闘い続ける。

主人公設定（後書き）

次はティアナのできること、見てください。

スイッチ４　スイッチャー（前書き）

今回はペルセウスゾディアーツのスイッチャーが出てきます。

スイッチ4　スイッチャー

一方、星牙は、昼食を食べるため屋上に向かった。

「さてと、俺の手作り弁当と・・・・章香さんのおにぎり（？）を食べなきゃいけないからな～」

星牙は張り切った様子だったが、章香の手作りを考えるとテンションが下がった。

「んっ？」

星牙は振り向くとそこには、画材道具で絵を描いている男子生徒がいた。

「何　描いてんだ？」

「邪魔しないでくれ！！　今、集中して描いているんだ」

「！？」

突然、男子生徒の一喝で星牙は黙った。

「へぇ～　いい絵じゃん　」
星牙は男子生徒の描いている絵をマジマジ見ながら答えた。

「ああ、この絵はミッドチルダの幼稚園の子達に渡すんだ。」

「ミッドチルダ！？　・・・（確かティアもミッドチルダの所属の組織にいるからな）

星牙はミッドチルダのことを聞いて、この絵はその幼稚園の子達に渡すんだと頷いた。

「だけど、この富士山の絵は、もう完成じゃん」

「いや！　まだだ。まだこの富士山には完成とはいえない」

男子生徒は真剣な表情で、富士山の絵を見た。
「！？」
星牙は男子生徒の絵を見て、一つだけビルが崩れかかっている所を見た。（このビル・・・前から崩れていたのか？」星牙は不安そう

に考えた。
「そういえば、君の名前はまだ、聞いていなかったな・・・・・・
君の名前は？」
男子生徒は星牙に名前を聞いた。
「俺の名は星牙・・・如月　星牙だ　よろしくな」
「僕の名は本山　惣師だ　よろしく　如月」
「ああ」
星牙と本山はお互いに自己紹介をした。
その時、
「♪ぼく～のな～まえははやぶさくん♪」
突然、屋上の下から、星牙の聞き覚えのある声を聞いて、屋上の下を見た。
「あっ　ユウキと・・・・あの三人は」

ユウキははやぶさくんの歌を歌っている三人を不思議そうに見た。

星牙はユウキの所まで屋上から降りた。

一人残った本山は・・・

「う〜〜う〜〜」

頭を抱え、何かに苦しんでいた。

一方、星牙は

「ユウキ！！」

「星ちゃん！！」

「何やってるんだ。この広い所で」

「実は・・・・私は合唱部の人達に私の歌を幼稚園児の子達に聴かせたいって依頼されたのーー！！！」

ユウキは両手を万歳しながら答えた

「依頼しました～」

「依頼しました～」

「依頼しました～」

それと同時に三人は同じことを歌いながら答えた。

星牙はアニメでこんな風に歌って現れた敵がいたな～と頭の中で思った。

「この人が合唱部部長の阿部くん」

ユウキは軽く自己紹介をした。

「よろしく　僕が部長の阿部だ」

「如月　星牙だ　よろしくな」

お互いに握手をして、自己紹介をした。

「しかし、なぜ、ユウキをあんた達が依頼したんだ」

星牙は部長の阿部に質問をした。

「実は・・・うちは男の部員が多くてね、今年は女子の歌をミッドチルダの幼稚園児達に聴かせようと計画していたんだ」

「へぇ～　あんた達もミッドチルダの幼稚園児達に会いにいくのか」

星牙は阿部達、合唱部の計画に納得して、またもう一回合唱の続きを始めた。

だが、それに苦しむ本山がいた。

「僕の集中を乱すもの・・・・・・」

本山は合唱部と一緒に歌っているユウキを睨み付けた。

「うあああああああ！！！！！」

本山はポケットからゾディアーツに変身するスイッチ、ゾディアーツスイッチを取り出し、スイッチを押した。

「うおおおおお！！！！！」

本山は変身したゾディアーツは前にビルを壊し、フォーゼと一騎打ちを張り合って戦ったペルセウス座のゾディアーツ、ペルセウスゾディアーツだった。　本山　惣師はペルセウスゾディアーツのスイッチャーだったのだ。

「うがぁ！！」

ペルセウスゾディアーツはユウキを排除しようと下に降りようとした時、

「全く、君は何故、こうも集中が途切れてしまうのかねぇ」

「！？」

《ガキーーーン》

「うがぁ！？」

突然、後ろを振り向いたペルセウスゾディアーツは棒を持った怪人に突きをかまされた。

ペルセウスゾディアーツは起き上がり、そこに立っていた者は幹部のゾディアーツ、ホロスコープスにしか着れない服に包まれ、頭は天秤とカミキリ虫をモチーフにした怪人だった。

「マスター・リベラ！！？」

ペルセウスゾディアーツは慌てて答えた。

怪人の名はリベラ　ゾディアーツ　ゾディアーツの幹部、ホロスコープスのメンバーだ。

スイッチ４　スイッチャー（後書き）

クロちゃんの方は、今月のところで投稿しようと考えています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8206z/

仮面ライダーフォーゼとメテオ 過去と目的の仮面ライダー

2012年1月5日00時49分発行